

「日々の理科」(第1968号) 2019, 11, 28

「東京の霧(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

先日の早朝、小石川(文京区)は濃い霧に覆われた。高原や海辺とちがい、温度のちがう空気(気塊)が直接ぶつかり合うことが少ない都会では、年間の霧の発生日数は少ない。しかし、晩秋には時々このような霧が発生する。これを「都市霧」という。



私の自宅近くの「湯立坂」(ゆたてざか)の風景。私は霧の風景を描くのが好きなので、あとから描こうと思って、珍しい東京の霧を何枚も写真に写しておいた。写真ではあまり濃い霧には見えないが、実際は「濃霧」に近い状態だった。



窪町東公園の入口から茗荷谷駅方面を見たところ。茗荷谷駅前の高層マンションが、霞んで見える。地上付近よりも、やや上空(数十メートル)のほうが、濃い霧に覆われているようだ。霧の正体は「層雲」という薄い雲だが、それが地上付近まで降下して、街全体を覆った時に「都市霧」となる。



すっかり晩秋の風景になった「教育の森公園」ここでは毎朝、「ラジオ体操」の一行が元気に運動をしている。私はめったに参加しないので、その脇を自転車で通り過ぎるだけだ。この日は人数が少なかった。



小学校の屋上にも上ってみた。さきほどの茗荷谷駅近くの高層マンションは完全に霧の中だ。すぐ近くの跡見学園の塔も霞んでいる。観測地からはっきり見える物体までの距離を「視程」というが、この日の視程はせいぜい300m程度で、「濃霧」に入るだろう。



小学校の屋上からは、普段なら約3km先のサンシャイン60の高層ビルも見える。しかしこの日は、学内の理学部の建物さえ霞んでいた。